

2014 年度新歓お試し号

その魂は誰のものか

若木士

深夜、コンピュータに向かって思索に没頭していると、部屋のドアがロックされた。

私は、画面を見つめたまま返事をする。

「博士、新しい「患者」が来ましたよ」

ブラッドは、入室するなりそう告げてきた。

「分かったすぐに行く」

「急いで下さい。ヴェルヘルムが処置室に運んでます」

コンピュータをロックしてから立ち上がり、ブラッドと共に部屋を出る。

「状態は？」

「胸の刺し傷と左腕の欠損、それに右の眼球が潰れています。あとは内臓がやられているみたいです。他にも——」

「助かりそうか？」

「駄目でしょうね」

処置室に入ると、足のついたストレッチャーの上に少女が寝かされていた。その横では、ヴェルヘルムが生命維持装置やモニタを少女に繋いでいる。

見ると、少女の身体にはいたる所に布が巻かれていて、そのどれもが赤く染まっていた。そして彼女は、傷を覆っているであろう布の他には、何も身に付けていない。

まだティーンにもならないであろうそんな少女を、私はじっくりと検

分する。

褐色の肌に、ブラウン色をした短い髪の毛。瞼を指で持ち上げてみると、瞳の色は黒だった。

「酷いな」

率直な感想を口にした。もちろんそれは少女が負っている傷のことで、彼女を襲った惨劇に対するものではない。

脈はあるし、呼吸もしている。今のところはまだ生きていようだ。ただし、このままではその行く末は目に見えている。

「どうします？」

ストレッチャーの向かいから、ブラッドが指示を仰いできた。

「確か保管庫に、この子と同じくらいの歳の子がいたな。一緒に来い。」

ヴェルヘルム、お前は装置「ラック」の準備をしろ」

人類は、未だに命を作り出す術を持っていない。

無論、生きた人間を作るだけならば簡単だ。精子と卵子を掛け合わせれば、それだけで新しい命は簡単に生み出せる。

だがそれは、命を作り出す技術を持つていこととはまるで違う。ただ自然現象に寄り添っているだけだ。太古から行われてきたセックスによる子作りと、本質的には何も変わらない。新しく作られた肉体に、命が付属しているだけだ。

この保管室では、六つの生体ポッドが並んでいる。そのうち四つのポッドは緑色の液体で満たされており、その中では死体が眠っている。

死体とはいえ、これらは生きた人間と何一つ変わらない身体をしている。生者と比べた際の相違点があるとすれば、それは生存活動をしてい

ないということだけだ。心臓も、肺も、脳も、動いていないという部分を除けば、どれも健全な状態である。むしろその点については、日常生活によって疲労が蓄積されている生者のものの方が劣っているくらいだ。たった一つの違い。だがそのたった一つが全てなのだ。

どんなに完璧に肉体を持っていようととも死者は死者にしか成り得ないし、どんなに肉体が破壊されていようととも生者は生者にしか成り得ない。ここで眠るものと、処置室で横たわる少女のように。

ここにあるのは、所詮肉の塊でしかない。水に酸素にリンに塩素にフッ素に鉄にケイ素にその他諸々が、ひと塊になって人の形を作っているだけだ。これを生者に変えて、初めて命を作り上げたと言える。

私は、右側の手前から二番目にあるポッドの前で足を止めた。

浮力が調節された液体の中では、生まれたままの姿をした少女が頭を下にして浮かんでいる。

ポッドに付けられたタグには少女のデータが記されている。それによると、ここに運び込まれたのは二〇一五年十月二十一日。身長四・五三フィート、体重七五・六ポンド。白い肌黒のロングヘア。そして瞳の色はブルーとのことだ。

「この子だ。運び出すぞ」

私はブラッドと、少女の搬出作業に取り掛かった。

処置室に戻ると、傷付いた少女には、すでに装置の片側が繋がれている。彼女の状態を示すモニタに目をやる。どの表示にもまだ問題は見られず、この子がまだ「使える」ことを示していた。

ブラッドが、保管室から運んできた少女を傷付いた少女の隣まで移動

させる。

無傷の少女は、液体を張った水槽に沈められている。身体が空気に触れることを極力避けるためだ。

装置から伸びるケーブルを彼女の頭に繋ぐ。それから各種測定器を繋ぎ、最後に呼吸マスクを装着する。

機器の準備と最終チェックが済むと、私は装置の画面の前に立った。横たわる二人を順に見やり、それからタッチパネルを操作して装置を作動させる。すると画面に作動中を示す表示が現れ、二秒後ほど経過してから元の画面に戻った。

と、傷付いた少女に繋がれた脳波図や心電図のモニタに映されている波形が、平坦な直線に変わった。そしてそれと同時に、もう一人の少女に繋がれているモニタ——起伏のない直線を表示するだけだった——が、正常な波形を刻み始める。

すなわち、二者の状態が入れ換わったということを、機械が告げてきたのだ。

「成功ですか？」

「だいたいだ」

無傷の少女に歩み寄ってその身体を自身の手で調べてみると、確かに少女は呼吸をし、その心臓はしっかりと鼓動していた。

それからもう一方の少女に目をやると、ヴェルヘルムが彼女の様子を見ていた。

「そっちはどうだ？」

訊くとヴェルヘルムは顔を上げ、

「死にました」

とだけ答えた。

つまりはこういうことだ。

生者であった傷付いた少女が死者になり、死者であった無傷の少女が生者になった、と。

この現象は、二年前に偶然発見したものだ。しかし、あくまで現象を確認できたというだけであり、その原理含めて詳細は何も分かっていない。命が移動したのか、命を消費してもう一人を生き返させたのか、それともまったく新しい命が作られたのか。今回を含めて二例しか確認できていないので、サンプルが圧倒的に足りてないのだ。

そもそも、この問題を議論するには、命とは何かという問いに対する答えを得なければならぬが、それにはまだ至っていない。

かつては、肺機能、心臓機能、脳機能の三つにより人の生死を定義していた。しかし、技術の発達により脳死の概念が現れ、その定義も変わっていった。どこまでが生でどこからが死か、その境界は時代が進むごとに曖昧になっていく。そしてロジカルに考えれば考えるほど、命というものの神聖さや尊さというものが失われていく。

ただどうであれ、死体だったものが息を吹き返したというのは、紛れもない事実だ。

少女が目を覚ましたという連絡が来たのは、約六時間が経過してからだった。

その報を受けて、私はすぐに彼女を収容している部屋の隣部屋に赴いた。

部屋に入り、マジックミラー越しに収容室内を一瞥する。すると全裸のままの少女は、ベッドから降りてガラスに掌を当てていた。

「様子はどうか？」

この部屋で少女を監視していたブラッドに訊ねる。

「さっきから部屋の中をうろろうしてますよ。出口でも探してるじゃないですかね」

「異常はないな？」

「見た限りでは」

「そうか」

少女はガラスを、そして続く壁をなぞる様にして部屋を周回している。動きがぎこちないのは、目覚めて間もないからだろう。

私は、彼女が奥に行つたのを見計らって収容室に入る。一方通行扉を開けると、すぐに彼女がこちらに振り向いた。

後ろ手で扉を閉め、少女に歩み寄る。そして少女を怖がらせないように注意を払いながら声をかけた。

「おはよう。英語は分かるかな？」

「はい。分かります」

答える少女からは、怯えや警戒心のようなものは見てとれない。

「そこに座ってくれ」

ベッドに腰掛けるように促すと、少女は素直に従った。私も、彼女の横に腰を降ろす。

「私はクラークだ。君の名前は？」

「フィオナ、です」

「穢れなき白^{ツルギ}か、良い名前だ。それじゃあフィオナ、君のことについて何か教えてくれないか？」

「わたしのこと、ですか？」

きょとんと訊き返してくる。

「ああ、何でもいい。歳は幾つだ？」

「えっと……分かりません」

「なら、他に何か分かることはないか？」

「ありません」

「そうか」

私は立ち上がる。

「分かった、ありがとう。もう暫くしたらここから出してやれるから、それまで待っていてくれ。いいかな？」

「はい」

フィオナの無垢な返事を聞き、私は扉をノックして合図を送った。そしてブラッドに外から扉を開けてもらい、部屋を後にした。

「服を着せてここから出してやれ。あとは予定通りだ」

「分かりました。——博士」

部屋を出ようとドアノブに手を掛けたところで、ブラッドに呼び止められる。

「なんだ？」

「個人つてのは、いったい何で定義されるんですかね？」

「どういうことだ？」

「身体に記憶や人格、そういったのが全部別のものに変わったとしたら、変わる前と変わった後は同一人物だと言えるんですかね？」

「さあな。そういう話はアレックスにしてやれ。ただまあ——」

私はフィオナを見やる。

「あそこにいるのはフィオナって名前の子供だ。他の誰でもない。それだけは確かだ」

* * *

○六四・第三次レポート

被検体は装置（ラック）による処置終了後、六時間後に目を覚ました。

覚醒直後から室内を歩き回るも、その動きにはぎこちない部分が散見された。時間の経過とともに改善されることが期待できるが、原因の特定も含め注視していく必要がある。

言語力については、英語による標準的な会話能力がある様子。読み書きやその他の言語については現時点では不明であり、今後の実験により検証する。

記憶については、自身の名前についての情報（本人によればフィオナという名前）のみ確認。この名前の出所については特定できていないが、被検体との関係が疑われるニュース記事を発見したため、末尾に添付する。

また、一般常識などその他の知識については未確認である。

精神面については、見知らぬ場所で見知らぬ人物に監禁されているのにも関わらず、恐怖や警戒の類が見られなかった。このことから感情が未発達、もしくは一部の感情が欠落している可能性がある。

（二〇一三年七月十三日の新聞記事より）

ダグラス在住のフィオナ・フレージャーちゃん（十一歳）が七月十一日に、学校からの帰宅途中に行方不明になった。母親によると、夜になっても娘が帰ってこないことを不審に思い周囲に聞き込みを行ったが、消息が掴めなかったため被害届を出したという。

これを受けて警察は、事件事故両方の線から捜査を始めたと発表した。

Real Timer 2014 年度年度新歓お試し号

発行人 高鳥 龍之介

編集人 石坂 耀

発行元 電気通信大学 SF-Z 会

〒182-8585 東京都調布市調布ヶ丘 1-5-1 電気通信大学内

URL <http://sf-z.info/>

E-mail info@sf-z.info

『SF-Z会』とは？

電気通信大学 SF-Z 会は創作小説、海外 SF の翻訳をメインに活動しているサークルです。

創作は SF に限ったものではなく、ジャンルの縛りはありません。

作品の挿絵や表紙絵を手掛けるイラストレーターさんもいらっしゃいます。

小説が書いてみたい！ 翻訳がしてみたい！ 絵を描いてみたい！

などなどちょっとでも興味がありましたら当サークルに！

もちろん経験者未経験者問わず！

新歓オリエンテーション中は
の展示を行っています。

にてこれまでに発行した会誌

新歓期間最終日 新入生歓迎食事会！ 日程終了後 生協前集合！
お気軽にご参加を！

普段は毎週金曜日 18 時より、学生会館 4 階和室にて活動しています。
また、4 月中の昼休みは学生会館 4 階ロビーにて、Z 会員がいますので
お気軽に声を掛けてください。

連絡先：info@sf-z.info

創作系サークル合同説明会

4 月 日 ()

主催：UEComic 準備会